

P2-048

長期の入院期間を要したネグレクト症例

森内 優子^{1,3}、高橋 智子^{1,3}、伊藤 公嗣^{1,3}、
米沢 龍太^{1,3}、柳澤 功²、高橋 昌里³

¹イムス富士見総合病院 小児科

²イムス富士見総合病院 医療福祉相談室

³日本大学医学部附属板橋病院 小児科

【はじめに】

近年、児童虐待に対する意識の高まりにともない、児童相談所への通告が増加する中、当院においても一時保護等を目的とした入院機会が増えている。その中で、養育者のネグレクトのために家庭復帰が進まず、長期入院を要した事例を経験したので報告する。

【症例】

6歳女児。乳児期にアトピー性皮膚炎と診断され、他院で教育入院が行われた経緯がある。当該入院時は、スキンケア等により症状は改善したが、外来通院に移行すると医師による指示が守られず、次第に症状は悪化した。離婚・別居していた父が、見と面会した際にこの状況を認知し、市役所に連絡の上で当院に紹介入院した。これを受け、当院の皮膚科を中心に治療プランを立てたが、見は感情の起伏が激しく治療に非協力的であったことに加え、医療スタッフに対する乱暴な言動も見られた。しかし、養育者である母親は、医師に抵抗する見を傍観するのみであった。その理由として、見には障害を持つ同胞がおり、その養育による負担や金銭的な生活困窮が窺われた。また、母方祖父母についても仕事を理由に養育が困難である旨を申し立てていた。見に対するこのような母及び母方祖父母の態度を踏まえると、いずれも見の養育に必要な資質に欠けている印象が持たれた。他方で、見はその入院中の態度から、発達障害等が疑われたため精査したところ、IQは平均的だったが、一般知識や社会的ルールの理解に乏しかった。このことから、養育者の医療ネグレクトが見の回復を妨げているものと判断し、当院の社会福祉士が中心となり、生活環境の整備を検討した。この見に関しては、もともと市役所が介入していたが、利用可能な福祉制度を家族へ案内するのみで、退院後の家庭訪問等には消極的であり、市役所から通告を受けた児童相談所も生命の危険がないことから取り合わず、家庭復帰の目途が立たなかった。そのため、当院が市役所と何度か協議の場を持ち、訪問看護による皮膚状態の観察等を義務付けるとともに、小学校や教育委員会も巻き込み、不登校等の状況があれば連携して対応する方針も確認した。結果、見の家庭復帰が可能となったが、入院期間は約2か月を要した。

【考察】

生命の危険のない被ネグレクト児は、種々の行政機関の対象から外れてしまうことから、家庭復帰が困難となり、入院した医療機関が負担を負う構図になっている。今回の事例を通じ、各機関の業務拡充の必要性を訴えたい。

P2-049

タバコ誤飲で入院となった患児の社会的背景の検討

内山 知佳、小橋 孝介、平本 龍吾

松戸市立総合医療センター 小児医療センター 小児科

【目的】

タバコ誤飲は異物誤飲の中で最も多く、当院にも多くの児と家族が受診する。そのような家庭にはタバコ誤飲を起しやすい家庭環境、見や保護者の要因があると推察される。本研究の目的は、当院にタバコ誤飲で入院した児の特徴を明らかにすることである。当院では、転倒・転落、熱傷、異物誤飲などの家庭内事故で受診し支援が必要と判断された事例に対し家族支援チーム (Family support team FAST) が介入し市町村と情報共有、その後の支援に繋げている。地域と連携することでみえてきたタバコ誤飲児の特徴もまとめる。

【方法】

2016年8月から1年間にタバコ誤飲やその疑いで当院に入院した小児患者を対象とし、診療録を用い後方視的に検討した。

【結果】

対象期間に入院したのは10人11機会、3人が2回誤飲を繰り返していた。年齢中央値は11か月(8か月-1歳6か月)、性別は男児が6例、女児4例であった。両親が共に喫煙者の家庭が3例、父が喫煙者が6例、母が喫煙者が1例だった。入院中に初回のFAST介入となったのが6例、再発例など事前介入があったのが2例だった。10例のうち、これまでに市町村が介入、フォローしていたのは半数の5例であった。背景因子として、子どもの因子では、発達の遅れが2例、体重増加不良で通院中の児が1例、環境因子では、家族構成としてひとり親が1例、若年親が2例あった。市町村への情報照会によって明らかとなった保護者の因子として、エジンバラ産後うつ病自己評価票高値が2例あった。1例は学生時代にうつ病の既往を認め、もう1例は新生児訪問の際に住環境の悪さを指摘されていた。

【考察】

タバコ誤飲を起こす家庭には事故が起りやすい要因があり、その中に養育支援を必要とする家庭が含まれることが示唆される。また、市町村に情報照会することで、医療機関では明らかにならない社会的背景も認めため市町村との連携は不可欠であると考えられる。